

# 展望的記憶に関する記憶補助ツールの影響

## ～ 利用頻度・有効性認知・コスト認知の関連～

0632041 勝又 昭容

指導教員：山崎 治 助教

### 1. 背景

人々の日常生活では、あらかじめ活動を計画し、それをタイミングよく想起する際に、「記憶補助ツール」(手帳やカレンダーなど)を利用するなど、様々な工夫がされている。遠山(2005)は、「記憶補助ツール」の使用は展望的記憶に対して有効と認知されているが、その方略は実際に利用されていないということを示した。さらに、その原因としてツールの利用に対して、「コスト認知」が関係していると推測している。

### 2. 目的

「記憶補助ツール」において、「利用頻度、有効性認知、コスト認知」の相互の関連を明らかにすることを本研究の目的とする。この際、「有効性認知の高い・低い」「コスト認知の高い・低い」が「利用頻度の高い・低い」に影響を与えていると考え、「利用頻度、有効性認知、コスト認知」の間には相互の関連があると仮説を立てた。

### 3. 調査(質問紙調査)

#### 3.1 調査対象

「大学生 53 名、社会人 25 名」合計 78 名  
(男性 55 名・女性 23 名)

#### 3.2 質問紙の構成

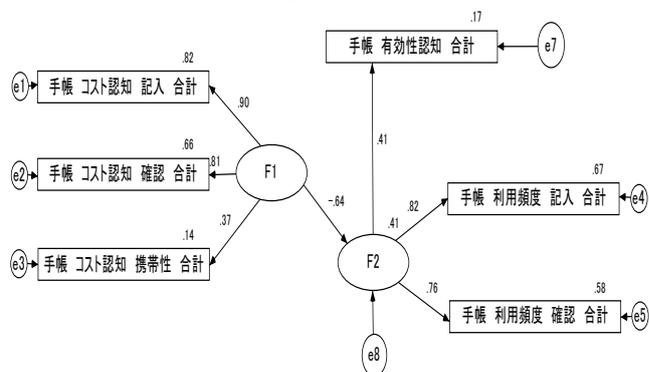
質問紙は全 61 項目で、「手帳、携帯(スケジュール機能)、Web カレンダー」の 3 つの記憶補助ツールに対して「利用有無、利用頻度、有効性認知、コスト認知」に関する質問を 5 件法による選択式で行った。

この際、利用有無の「はい・いいえ」での回答に対して、「いいえ」と回答した場合は、もしそのツールを利用するとしたらという仮定で質問紙の回答を求めた。利用頻度、コスト認知に関しては、「記入(3 項目)・確認(3 項目)・携帯性(2 項目)」の 3 つの視点を用意し、有効性認知に関しては、「そのツールの利用が有効だと思うか(5 項目)」という質問項目を用意した。

### 4. 結果・考察

共分散構造分析(AMOS)を用いて、各ツールにおける「利用頻度、有効性認知、コスト認知」の相互の関連をパス解析により分析し、パス図によって視覚的

に表現した。ここでは、利用者 72 名の手帳に関するパス図を図 1 に示す。



指標	RMR	GFI	AGFI	AIC
7.910	0.257	0.966	0.910	33.910

図 1：手帳の利用頻度、有効性認知、コスト認知のパス解析

図 1 のパス図の矢印の方向より、手帳に関しては、「F2 の利用頻度」が、「有効性認知」に影響を与え、「F1 のコスト認知」が、「F2 の利用頻度」に影響を与えるという因果関係が明らかとなった。これより、手帳は有効性を認知してから利用し始めるのではなく、まずは利用してみることで手帳を使用している間に有効性認知を高めていくと考えられる。また手帳に関しては「利用者」を対象にデータが分析されているため、すでに手帳を利用することが前提となっており、その利用回数が多くなればなるほど、スケジュール管理に対する手帳の効用を強く感じていたのだと想定される。

### 5. まとめ

記憶補助ツールの利用において、ツールごとにコスト認知の影響の仕方が異なることが分かった。つまり、それぞれのツールの利用頻度は、コスト認知や有効性認知の影響を必ず受けているというわけではなく、ツールによって、様々な別の要因が影響を与えていると考えられる。個人の記憶補助ツールに対する「意識の仕方や存在価値の考え方」で利用の仕方は大きく変わるのではないだろうか。

### 参考文献

遠山智子(2005).『展望的記憶方略利用頻度尺度および展望的記憶方略の有効性認知尺度の作成—尺度の作成および尺度間の関連性の検討—』名古屋大学大学院教育発達科学研究科紀要. 心理発達科学, (52), 173-181.